OPINION
中部経済新聞

日本への期待
世界各地から
44

大統領家族の命を救う

「サムライ外交官」堀口九萬一

1910年に始まるメキシコ革命の最後のクーデターは13年2月9日にメキシコシティ中心部で起き、「悲劇の10日間」と呼ばれる。晴れた日曜日の朝、首都中心部がその舞台となったという知らせが、堀口九萬一家と親交のある大統領マデロ家近隣の日本大使館に届く。堀口夫妻は急ぎ朝食をとり、大統領官邸に向かう。緊急通告を受けた大統領は、反乱軍を鎮圧に士官候補生と国立宮殿へ出発したところだった。

戦闘は市街地で始まり、反乱軍が国立宮殿を奪取するが、数時間後に大統領側が奪還。その夜大統領は、多数のマデロ一族を日本大使館に亡命させ、自分はクエルナバカに車で移動、部隊を再編成する。大統領の両親、2姉妹、妻のサラ、総勢30人が日本大使館に避難した。堀口は「非常に興奮して神経質になっている彼らを慰めるために、『この家にいれば安全だ、命を守るために可能なことは何でもする』」と伝える。

反乱軍が攻撃する可能性があるにもかかわらず、堀口はマデロ一族の避難を認める。実際、付近で暴力や襲撃があり、堀口を含む20名もの日本人が銃や刀で武装、マデロ一族を守った。大使館は襲撃されることはなく、在留日本人は大使館に食料品を届け、東京や他国大使館に電報を打つなどした。大使館を銃撃戦下に置くことだけでも危険な中、英雄的な行為である。

2月14日マデロ邸は襲撃され、焼失。マデロ一族と堀口家は、日本大使館の屋上からその煙幕を目撃する。18日、マデロ大統領と弟の下院議員グスタボ・A・マデロは、反乱軍に国立宮殿で逮捕され、弟はその日に銃殺。大統領と副大統領は辞任し、ビクトリアーノ・ウエルタが政権に就く。22日には二人は暗殺される。マデロ一族は20日に日本大使館を離れ、やがてキューバに無事亡命。

3月23日、堀口九萬一はメキシコを離れる。サリナ・クルス・オアハカを出航し、東京へ向かう。その後1925年の外務省退官までスペイン、ブラジル、ルーマニアなどで奉職し、45年に80歳で長岡近郊に死去した。堀口はマデロ一族を守り、要人や大統領の死にもかかわらず、あらゆる状況下で外交活動を継続したことで、メキシコの多くの人々、さらにはウエルタ大統領からも認められ、その偉業から「サムライ外交官」と呼ばれる。

2015年7月、メキシコ上院は日本の国会議長および安倍晋三首相に、マデロ大統領の家族の命を救った堀口とその子孫、そして日本社会に対して「外交関係史上の超越的行為に対する謝辞と盾」を贈りました。その行為は、人道主義と勇気の手本であると。

メキシコ独立の歴史と自由で民主的な主権国家になるための闘争と堀口九萬一について2回で記したのは、外交官としての高貴な価値観と、何よりも最高の倫理観を体現した介入について再確認するためです。100年以上も後に送られた謝辞は、400年以上続く両国の外交・友好の絆を示す一つの例です。メキシコと日本の友好の絆を深めるための感謝に加えて、ここで記録するに値すると私は確信します。

【ノーマンウルフ（UNAMビジネススクール教授）、リーム中産連】

（月曜日に掲載）